西東京市市民協働推進センター

平成 26 年度第 5 回運営委員会会議録（確定稿）

■開催日時：平成 26 年 9 月 16 日(火)午後 7 時～9 時 10 分
■開催場所：イングビル 3 階第 1、2 会議室
■出席委員：池田委員、熊田委員、紺野委員、坂口委員、田中（紀）委員、田中（友）委員、谷委員、豊永委員、中村委員、藤江委員＜以上 10 名、五十音順＞
■事務局　：内田センター長、鈴木、栗山事務局長、丸木地域福祉課長、塚澤主事

○坂口委員途中参加のため、前半は代行として豊永副委員長が議事進行を行った。

1. 報　告　事　項

１．業務報告について

事務局より、7 月期、8 月期の主催事業、その他の事業、ホームページアクセス数、新規登録団体、市民活動相談状況について説明をしたが、特に質疑はなかった。

２．9 月以降の事業について

事務局より、9 月以降の実施事業であるゆめサロン、NPO 市民フェスティバル第 3 回実行委員会、近隣 6 市中間支援組織情報交換会、NPO 市民フェスティバル第 4 回実行委員会、NPO 市民フェスティバル事前説明会、協働を考えるシンポジウム、ゆめサロンについて説明があった。

委　員：今の時点で市民フェスティバルへの申込は何件か。

事務局：現時点で十数件である。

2. 審　議　事　項

１．前回の会議録について

副委員長：特に意見がないようなので、未定稿を確定稿とする。

3. 協　議　事　項

１．協働推進事業について

事務局より、まちづくり円卓会議の企画案について説明があった。

委　員：8 月 4 日実施のまちづくり円卓会議で一区切りついたとのことだが、その判断基準は何か。

事務局：バリアフリーの居場所づくりのテーマで約 1 年間実施してきたが、ノーマライゼーションの会をつくる動きに繋がったことにより、ゆめこらぼの手を離れる形になったことで判断した。

委　員：成果物としてか。

事務局：そうだ。ノーマライゼーションの会というネットワークができたことにより、ゆめこらぼの事業とは別に動きだしたと判断している。

委　員：今年度のスケジュールでは第 2 回、第 3 回とまちづくり円卓会議を実施することになっているが、第 2 回で成果物ができたらそれで終わりになり、第 3 回は別のテーマになるのか。それと

も第３回は、引き続き同じテーマでやるのか。

事務局：第２回で終われば、第３回は別のテーマを考える必要もある。しかし、会議をやって終わるというのでは使命が果たせない。ある程度形が出来るところまでは関わる。課題について主体的にやっていかなくてはならないという人を掘り起こして、その方を中心に仕組みをつくらなければならないと考えている。また、昨年に実施して出来た人的財産を活用しながらやっていきたいと考えており、全く別の課題でゼロから立ち上げることは考えていない。今年度は受託している最終年度なので来年度のことは分からないが、まちづくり円卓会議は市の立場に立っても重要な事業になると思うので、仮に他の団体が受託しても引継げる形にしたいと考えている。

委　員：テーマである少子高齢化における地域コミュニティだが、アンケートで地域コミュニティ、防災、子どもとあるが、なぜ最終的にこのテーマになったのか経緯を説明して欲しい。

事務局：今までのテーマであった居場所の延長として意識するとともに、防災、子どもの課題も地域コミュニティとして位置づけられると考えた。協働を考えるシンポジウムもテーマ型コミュニティづくりがテーマであり、まちづくり円卓会議につなげていけるのではないかと考えた。

委　員：アンケートの段階で地域コミュニティ、防災、子どもと３つあるがどういうふうに出てきたのか。子どもとあるが広範囲であり子どものどの部分を指しているのか。

事務局：参観者などに実施アンケートで、今後取り上げて欲しいテーマとして結果に残った。単に「子ども」と記入があるだけで、どこを示しているかはわからない。無記名のため追跡調査できなかった。

委　員：7 月に西東京市で中学生が自殺した事件があり、西東京市では大きなテーマだと思う。地域コミュニティが今回テーマになったのは重要なことだと思うし素晴らしいが、若干引っ掛かる。少子高齢化時代の地域コミュニティづくりというテーマだが、いま優先すべき課題は少子高齢化ではなく格差である。地域に参加できない人をどう取り込むかが問題である。このことが今西東京市で取り組まなければならないテーマではないかと思う。地域コミュニティが出来る人たち、つまりお金があったり、時間がある人、ゆとりがある人が集まってきて地域コミュニティをやりましょうというものではなく、別のものが必要なのではないか。

委　員：今回の企画に示されたテーマでは、広すぎると感じる。協働を考えるシンポジウムとの連携とか、今まで取り組んでいた障がいのある人もない人も分けない居場所づくりと繋げるためにかなり苦肉の案で打ち出したと思うが、何でも話ができるということは逆に何も話せないということにもなる。既に、大きな事件が起こっていてそのことをどう取り扱うかは当事者の方もいるので傷つく人もあり難しいところなので慎重に扱わなければならないが、地域の中でそういった問題が起こっているのは事実である。格差の問題、繋がれない人たちをどうつないでいくかという切実な問題が見えてきている。繋がりたいと思っているけれど繋がれない人がいて、そういう人たちが居場所をどう作っていくかというところで、まちづくり円卓会議の連続性を確保してもよいのではないか。協働を考えるシンポジウムとの連動性は考えなくてはならない。地域づくりも良いが、何の地域づくりなのか。一つは格差社会における西東京市の居場所づくりとなれば、かなり活発な意見がでるのではないか。

事務局：まちづくり円卓会議の事務局の立場からいうと問題提起だけでなく、アウトプットに結びつけていかねばならない。格差からくる問題に対して本当に解決する熱意のある人に会議メンバーに入ってもらうことを考えていかなければならない。そんな人を見つける必要がある。

委　員：第１回まちづくり円卓会議のメンバーであったが、居場所づくりという「居場所」の三文字が、

集まったメンバーにより捉え方が違った。繋がれない人とどうつながるかと問題提起になるようにキーワードを絞ってはどうか。スケジュールからいくとシンポジウムと連動しての筋道しか見えてこない。

委　員：地域課題を解決していく事を目的としているなら、第1回のまちづくり円卓会議では解決はしていないと思う。目的が解決するための方法を生み出すことであれば全く違う。ノーマライゼーションの会の動きがあったので手放したとのことだが、解決することが目的なのであれば、解決してないのだから手を放してはいけないのではないか。また、少子高齢化と緑がどう考えても繋がらない。協働を考えるシンポジウムと連動させなくてもよいのではないか。

事務局：具体的課題を解決することそのものはまちづくり円卓会議の目的ではないと説明し、運営委員会で了承は得ている。ゆめこらぼ自身は課題解決そのものをするのではなく、課題解決に向けて動き出すあるいは方向づけられるのを見届けるまで関わることと考えている。

委　員：そうであれば、解決することを目的にしているのではないことを明確にすべきだ。

事務局：了解した。

委　員：実際に行動しているものとしては、理論づけで動くことはしない。具体的な方法があれば理論的なことではない解決策が出てくる。動くというのは具体的なことによって動いて行くという発想をしたい。

委　員：少子高齢化時代における地域コミュニティのテーマではあまりに幅が広すぎる。市民に意見交換会に来てくださいと呼びかけても的が絞れないのではないか。協働を考えるシンポジウムは単なる呼びかけの場と考えてはどうか。まちづくり円卓会議に繋げなくてもよいと思う。

事務局：協働を考えるシンポジウムとまちづくり円卓会議を無理につなげるわけではない。今回は、テーマ型コミュニティづくりがテーマであり、つなげられるのではないかと考えた。

委　員：協働を考えるシンポジウムは緑に興味がある人がくると思うが、格差でまちづくり円卓会議をするのであれば、繋がらない。緑に関心のある人が格差まで考えられるのか。緑と格差では難しい募集の仕方になるのではないか。

事務局：標記の問題があるかもしれない。協働を考えるシンポジウムはきっかけづくりであり、その中から絞って考えていきましょうと、市民の皆さんから意見を頂いて絞って円卓の議題にしたいと考えている。シンポジウムだけではなく市報でも呼びかける。

委　員：テーマを決めずに広く募集するのか。

委　員：緑に興味があってきた人と少子高齢化に興味があってきた人がくるとは思えない。

事務局：最終的なテーマは意見交換会で決めてもらいたいが、意見交換会の呼び掛けは訴求力のあるような打ち出し方を検討する。

委　員：第2回、第3回のまちづくり円卓会議のテーマを市民の中から出してもらおうと思った理由は何か。

事務局：今までの一年間は事務局あるいは会議メンバーというクローズされた中でテーマを決めてきたため、より広いマルチステークホルダーにすべきとの意見があったので、今後は広く市民の立場でテーマを決めたい。とりあえず少子高齢化での地域コミュニティというテーマとしたが、格差やつながらない子どもをどうするかという点に絞ってもよいと思う。市民が本気になって取り組むテーマにしたい。公開する形で議論をしてもらうために市民参加型意見交換会で行うことを考えている。

委　員：11月の意見交換会はコーディネーターはいるのか。

事務局：ゆめこらぼのスタッフで行う。

副委員長：広くテーマを拡散していろいろな場で参加者を募り、いろいろ出してもらったテーマを最終的に絞り込みまちづくり円卓会議に繋げていくということでよいか。

事務局：段取りについてはこの場で了解を得たい。12 月の市民参加型意見交換会を踏まえてテーマを見直す。この段取りについて問題なければ、概略了解という形にしていただきたい。

委　員：一般の人に参加してもらうのは難しい。理解してもらいにくい。何か具体的なことが書いてあることで関心を持ってもらう必要がある。私たちでもこれくらいの内容では興味はわかない。具体的な事例を出して呼びかける必要があるのではないか。

事務局：格差の問題、繋がらない人のコミュニティづくりなどご指摘いただいたいくつかのテーマを挙げて関心がある人を意見交換会で募集する。一つの言葉で全部のことをいうのではなく関心のあるもので集めて、本気になってしたいという人がいるテーマに絞り込んでまちづくり円卓会議を行いたい。

委員長：少子高齢化という言葉を削除し、これからの地域コミュニティのあり方ということにしてはどうか。意見交換会からテーマが決まった場合、テーマの議論をするにふさわしい参加者を募るべきである。

委　員：いろいろなテーマがあるのは分かるが、西東京市が今何をやるかを考えなくてはならない。虐待されて自殺した子どもがいて地域として何もできなかったという事実がある。その子は自殺ということで抗議した。われわれ大人は受け止めて考えなければならない。

委　員：広く市報で募集します。意見を持っています。集まってきました。後はステイクホルダーの方お願いしますという点に違和感がある。特定のテーマ設定の中でそれに対して熱意のある人が集まり、問題意識を持っている人が議論しなければ解決できないのではないかと感じる。

事務局：意見交換会の中でいくつかの課題が出たらその中で絞る予定である。

委員長：先に、メンバーを固定せずに意見交換会をやっていき、みんなでテーマを出すのはよいが、いくつかのテーマが出た場合、テーマをどうやって絞るのか、誰がテーマを決めるのか、テーマの決め方が問題である。テーマが決まってからメンバーを決めるべきである。

事務局：テーマが出たら自分が主体となって最後までやるかどうか、又はそういう人を知っている等、来た人の中で優先順位をつけるしかない。

委員長：それを誰が決めるのか。ファシリテーターが大変だ。

副委員長：今、西東京市がこの問題を語り合わなければだめなのではないか。この問題を取り上げて、経験者も含めて解決を生み出す方向に向き合うことが大切ではないか。この場でテーマを絞り込んでしまっても良いのではないかと考える。

委員長：やり方は２つある。幅広いテーマ出しをしてそこから絞り込む方法と、もう少し絞り込んで地域の中でリーチできないような方々をどう救っていくか、どう寄り添うか。練馬区社協のキャッチフレーズはひとりの不幸も見逃さないという言い方をするが、これまでリーチできてないような人たちにもリーチできるような地域コミュニティのあり方まで絞り込んで市民の方たちにざっくばらんな意見を出してもらうのも一つのやり方である。運営委員会の中で後者の方がみなさんの意見となるなら、既に少子高齢化と書いてあるので、同じような形で、すこし限定した形での地域コミュニティのあり方という議論に持ち込むというやり方もある。

２．市民活動団体・NPO 支援事業について

事務局より NPO 市民フェスティバルの説明

事務局：市民参加が少ないので集客を促すための企画を考えている。

委　員：一般市民の参加を促すために、パフォーマンスが重点的な取組みとなっているが、パフォーマンスが終わってしまうとみんな帰ってしまうことも多い。パフォーマンスを見てもらうのはよいが、その後パネルを見てもらう誘導が必要ではないか。展示を見てもらうこと、理解を深めてもらうことが重要なのでそこまで考えて欲しい。司会者に会場を見てもらうことを促してもらうなど、帰らせないような仕掛けが必要なので検討して欲しい。

事務局：地域の中で活動しているバンド等を検討している。演奏するだけではなく、地域で活動している経緯を話してもらうなど、つなげるように考えたい。

委　員：ＭＣ（司会）は大切である。気の利いたことを一言言ってもらえる、ここの主旨をわかってもらうための一言をお願いしたい。

委　員：フェスティバルの狙いはなにか。参加団体の交流がねらいなのか、新しい人に参加してもらうことがねらいなのか。後者ならば参加する立場としての意見だが、ブースへ行ったら体験会の参加とか、募集しているとか、具体的だとよい。ブースを見るだけ、展示を見るだけでは参加意欲がわかない。来る人がそのつもりでくるような呼びかけをして欲しい。

委員長：各団体に対して、もし参加したいという人には具体的にこんなことができるという提示なり、意思表示をしてもらう。冊子に明記してもらうなど工夫が必要である。

委　員：興味のある活動に参加することができるという呼びかけがしっかりあると足を運びやすい。場合によっては体験まで出来るという道筋があれば興味が湧くのではないか。

委員長：NPO なんでも相談室があるとか、どう関わったらいいかわからない人が相談できる、気軽に聞けるコーナーを設け、相談機能を充実させる。ここへ来ればあなたも参加の出会いがあることをきちっと書くのは重要である。

委　員：おとぱには大変興味があるが女性の参加はどうなのか。リタイアするのは必ずしも男性だけではない。社会にもっと女性も入って欲しいという観点からおとぱという言葉も再考してはどうか。

事務局：女性も参加してもらいたい旨記入する予定だ。

委　員：おとばは一般的な言葉になっているのか。

事務局：NHK でもおとぱという言葉で取り上げられている。

委　員：男性が社会に入る方が大きな問題だと思うが、女性を無視しているのではないかという意見もあるのではないか。

委　員：お母さんは積極的に出てきているので、男性を引っ張らないとならない。

委　員：表彰式で展示が良かったという団体を表彰するのは絶対やめてほしい。団体を評価する必要はない。

委　員：私も同意見。誰が評価するかも問題である。表彰に時間を取られるなら他のことに力を注いでほしい。

事務局：表彰式の件は実行委員会に戻します。

３．今後のセンターのあり方について

「平成 27 年度以降のゆめこらぼ事業」について事務局の説明後、協議を行った。

4. そ　の　他

１．次回運営委員会日程について

日時：平成 26 年 10 月 21 日（火）19 時～21 時

会場：イングビル 1 階　ゆめこらぼサロンコーナー